

1. 調査の経過（日誌抄）

昭和55年10月18日～11月15日 昭和56年4月1日～4月24日

昭和55年度

10月18日～10月25日 機材搬入等、調査態勢を整え、東側からバックホーによる表土除去にかかる。溝状造構が数条検出され、調査に着手する。

10月26日～11月1日 道路部分より東側の表土除去を終え、西側に入る。調査範囲内に14条の溝が検出された。2～7号溝の測量を終える。

11月2日～11月9日 西側で1・10号溝の続きと11・12号溝を確認し、調査に着手する。8・9・13・14号溝の測量を終える。

11月10日～11月15日 1・10・12号溝の調査・測量終了。3箇所に先土器調査の深掘りを行なうが、遺物は検出されなかった。全体の写真撮影を終え、今年度の調査を終了する。

昭和56年度

4月1日～4月8日 町道より南側部分の調査に入り、南側からバックホーによる表土除去にかかる。

4月9日～4月16日 雨の日が多く表土除去はかどらず。

4月17日～4月24日 表土除去を終了し、精査を行なうが、造構は確認されなかった。

2. 遺跡の概観

上新田遺跡は、大宮台地のはば中央に位置し、標高15m前後の微高地に所在する。

調査範囲は長さ約160m、幅約23mと北西から南東にかけて細長く、途中東西に町道が横切っている。町道より北を1区、南を2区として調査を行なったが1区からは造構は検出されなかった。

1区からは溝14条が検出されている。覆土が近・現代の耕作土層を主体としていることから、江戸時代以降のものと考えられる。また、これらの溝のほとんどは、平行・直交しており、一部現在の地籍に合致するものもある。これらのことから、検出された溝は地境の根切り溝と思われる。

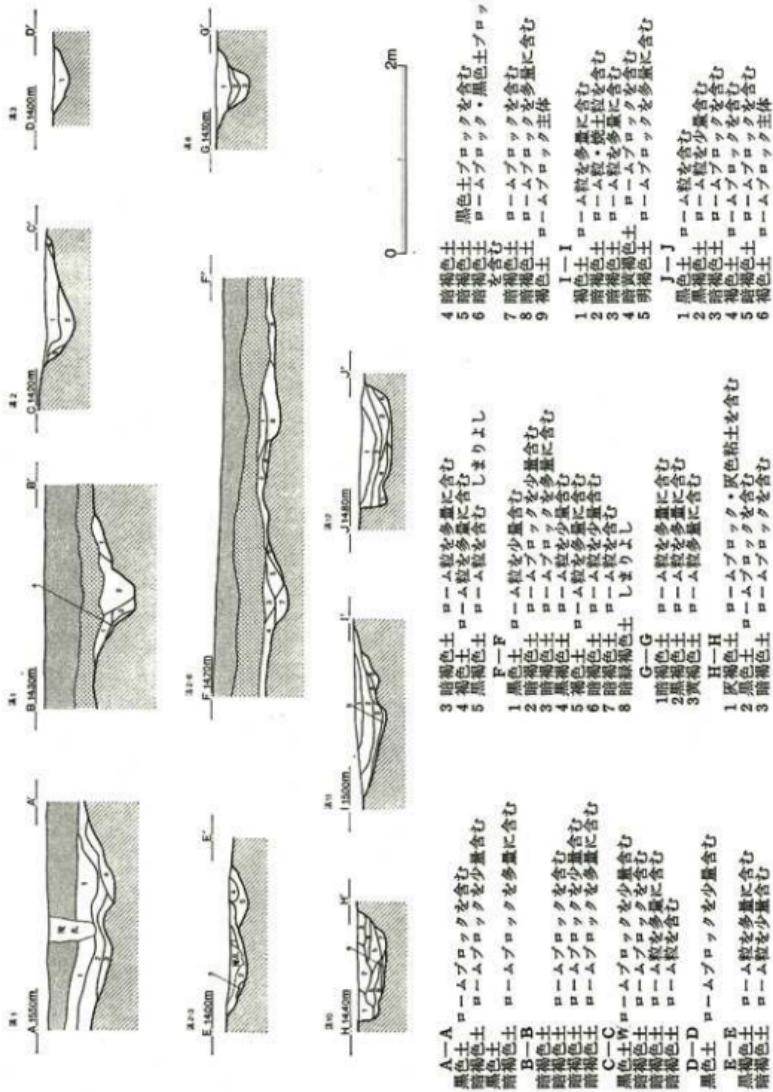
遺物はほとんどが縄文土器片で、造構と関連しないものである。

3. 造構と出土遺物

A. 溝（第99・100図）

本遺跡からは14条の溝状造構が検出されている。直交するもの、直角に曲折するもの、平行するものは、最近の地籍図と照合すると地境にあてはまるものが多く、根切り溝である可能性が強い。

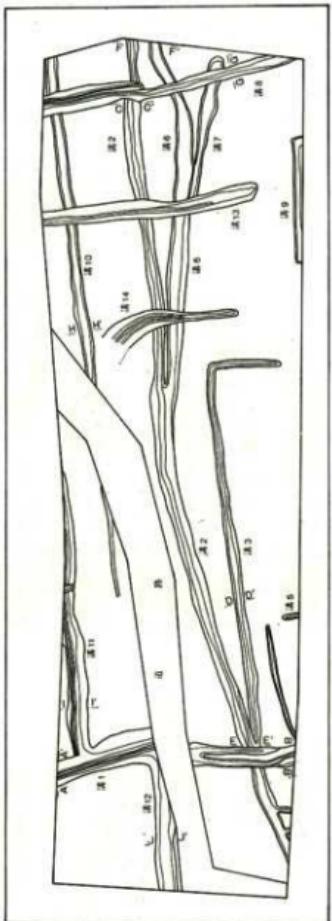
（浜野 一重）



第99圖 薄土層斷面圖

B 包含層出土土器 (第101~103図)

本遺跡に於いて出土した土器より分類可能なもの 100 点を抽出し、從来の型式変遷観に従い、時期・文様などにより分類を行なった。



I群 前期

1類 鐵縫土器(1)。胎土が緻密で鐵縫を含み、焼成良好であるが、つくりは粗雑である。

2類 貝殻腹縁による鋸歯状文が施される土器である(2)。一方を支点にして貝殻腹縁を押し引いたもので、浮鳥式に比定される。

II群 前期末～中期初頭

1類 結節繩文が施されるもの(3)。砂粒を多量に含む R L の結節繩文である。

2類 爪形文が施されるもの(4)。刺突を中心点として、渦巻状に沈線に沿って爪形文が施される。胎土粒子はやや粗く、焼成もやや不良の脆弱な土器である。

3類 押し引きの沈線が施されるもの(5)。押し引きが横位に行なわれ、その下に波状に押し引きが行なわれるものである。

III群 中期

1類 隆起線に沿って爪形文が施されるもの(6～8)。7・8は胎土が粗くやや脆弱である。8は爪形文が2段施される。

2類 隆起線によって文様が構成されるもの(9)。口唇部が内折する深鉢形土器である。頸部で括れ、胴部が張る器形であろう。頸部付近に細い

隆起線が残存している。胎土は粗く、細緻を多量に含む。内面調整は粗雑である。外面もナデを加える程度である。

3類 繩文が施されるもの10。波状口縁部に無文部をもち、稜によって以下の繩文施文部と区画がなされる。繩文はLRである。加曾利E末の土器であろう。

IV群 後期初頭から前半 細緻・砂粒の含有量の多い土器が目立つ。

1類 沈線区画内に繩文が施されるもの。

a) J字文・スペード文をもつもの(11~14)。11はJ字スペード文の一部である。RLの繩文が施されている。13はJ字文+スペード文の一部である。RLの繩文施文後磨消しが施されている。内面は磨きが加えられる。14はLRの磨消繩文である。以上称名寺I式に比定されよう。

b) 縦方向に沈線が施されるもの(15~18)。15はLRの磨消繩文である。16は沈線区画の後、繩文を充填しており、そのために沈線が潰れかかっている。無文部はよく磨きが加えられ、白色粒子を多量に含む。18はRLの磨消繩文である。沈線が浅く施されている。4~6ミリと器厚は薄い。

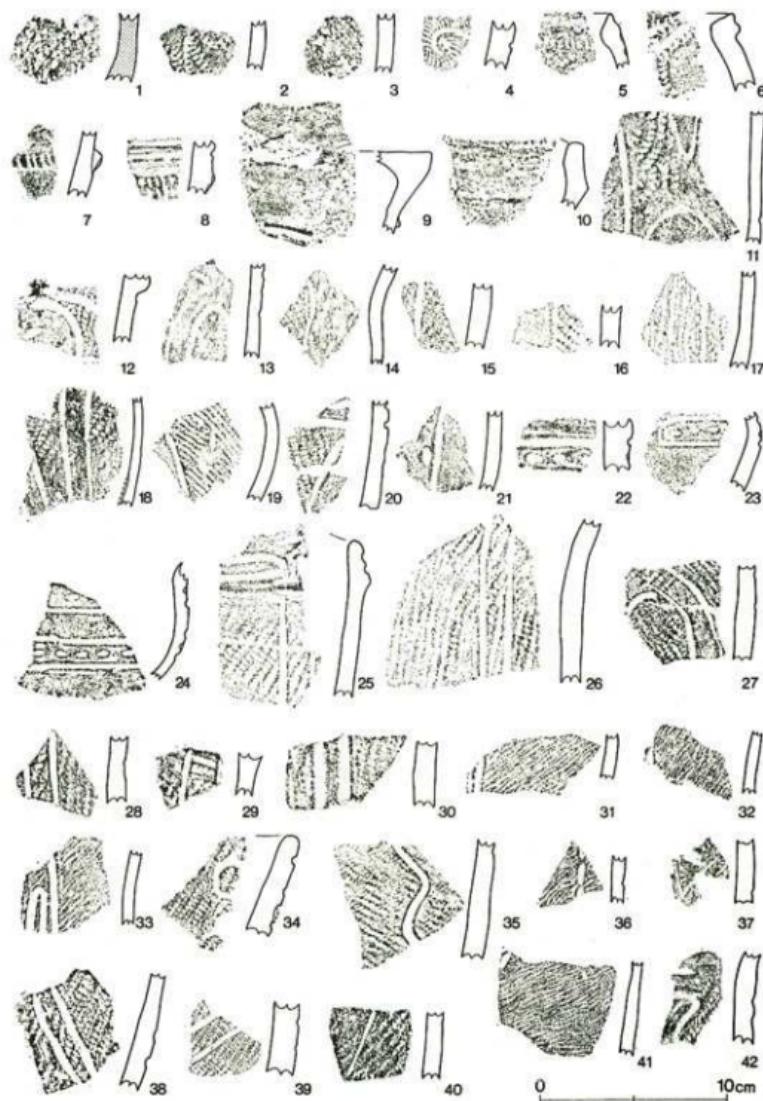
c) 斜方向に沈線が施されるもの(19・20)。19は無節LRの磨消繩文である。無文部・内面ともよく磨かれている。20は三角文の一部である。沈線は深くはっきり施される。繩文はLR、色調は赤色である。

2類 沈線区画内に列点が施されるもの(21~24)。21は丸棒状工具による沈線区画内に同じ工具による梢円形の刺突が施される。胎土粒子は粗いが焼成良好のしっかりした土器である。称名寺2式に比定されよ。22の列点は引っ搔いたものである。23・24は同一個体と考えられる。長梢円の区画内に烈点が施される。胸部は張り、頸部で一担括れて口縁は外方へ開く器形である。内外面とも器面調整は粗雑である。23・24は堀之内I式に比定されよう。

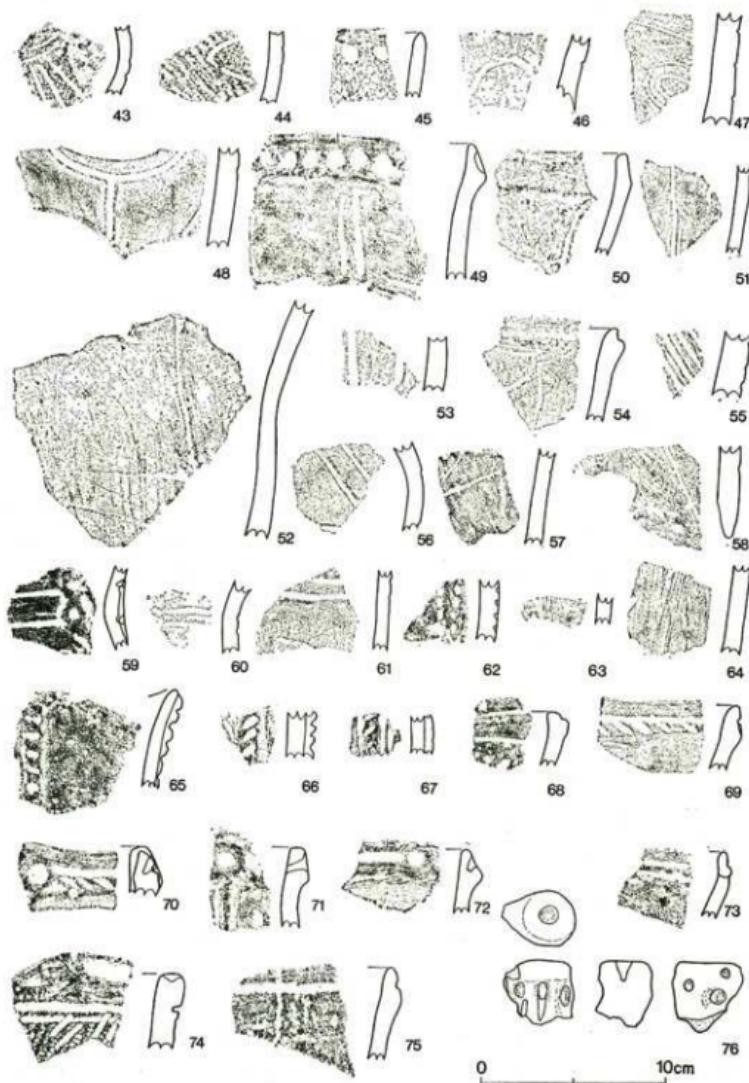
3類 繩文を地文に有し、沈線でモチーフを描くもの。

a) 縦方向に沈線が施されるもの。U字状逆・U字状文・藤手文・蛇行沈線などがある(25~36)。25は緩い波状口縁でLRの繩文地に沈線が施されている。白色粒子を多量に含み、内面はよく磨かれる。26~30はLRの繩文地に沈線が施される。31~33は反の撚りLLRの繩文地に丸棒状工具による沈線が施される。白色粒子を多量に含み、焼成は良好で内面に磨きが加えられている。34はLRの繩文に藤手文が施されている。胎土粒子が粗く、焼成もやや不良である。35はLRの繩文に蛇行沈線が垂下するものである。胎土粒子が緻密で焼成良好である。36は反の撚りLLRの繩文に破線状に沈線が施されたものである。砂粒を多量に含み焼成良好で内面は磨きが加えられる。25~28・30~36は堀之内I式であろう。

b) 斜方向及び横方向に施されるもの。三角文・菱形文などがある(37~41)。37はLRの繩文に三角形の沈線が施されている。胎土粒子は粗い。38~40はLRの繩文である。38は繩文や沈線が深く施されている。39・40は繩文や沈線は浅く施され、内面に磨きが加えられる。白色粒子を多量に含む。41は反の撚りLLRの繩文である。白色粒子を多量に含み、焼成は良好で内面も磨かれている。37~39・41いずれも堀之内式であろう。



第101図 包含層出土繩文土器拓影(1)



第102図 包含層出土繩文土器拓影図(2)

c) その他 (42~45) 42はLRの縄文に丸棒状工具で沈線を施したものである。43はLRの縄文に弧状沈線と、そこから放射する沈線が施される。胎土は密だが、焼成はやや不良である。44はLRの縄文に描かれている。内面はよく磨かれている。45は縄文の上に口縁に沿って指頭で円形の刺突を施している。いずれも掘之内式であろう。

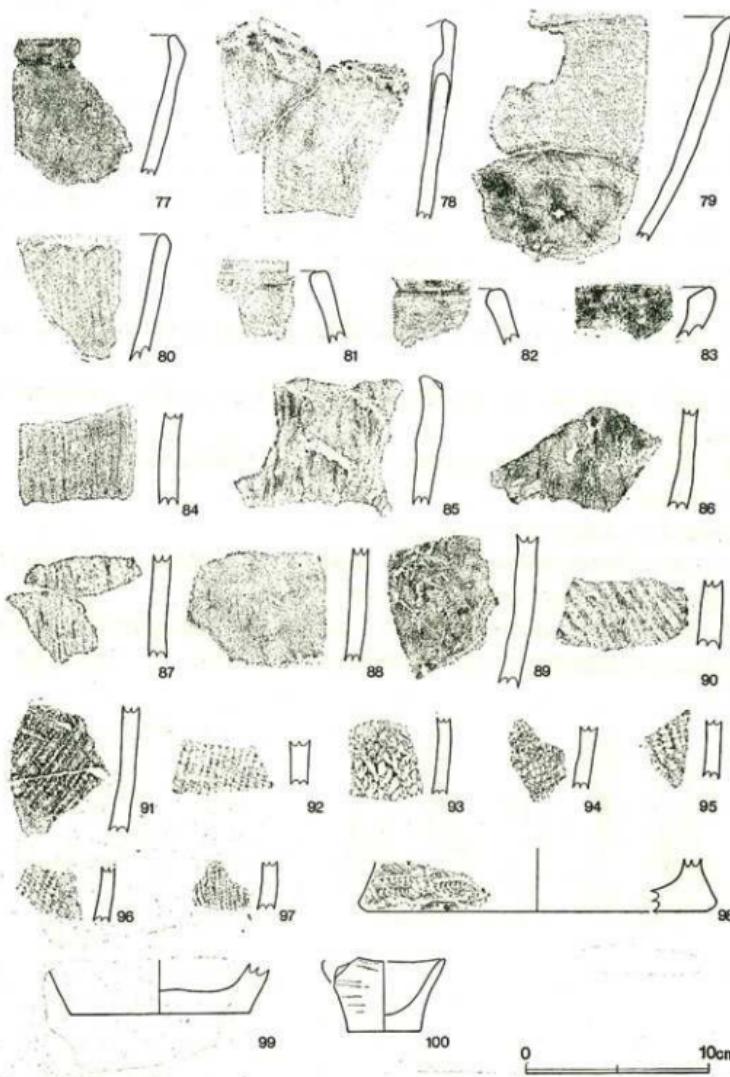
4類 沈線のみで文様が構成されるもの。

- a) 沈線が曲線を描くもの (46~48)。46は鉤状文の一部であろう。47は尖り気味の工具で梢円形の沈線を描くものである。12~15ミリと器厚は厚い。白色粒子を多量に含む。48は弧線から垂直に沈線がのびている。器面調整はナデのみで、沈線を引いた後の再調整は行なわれていない。胎土粒子は密で、砂粒・白色粒子を含み、焼成良好である。46は称名寺式、47・48は掘之内式であろう。
- b) 縦方向に沈線が施されるもの。U字状文・逆U字状文・藤手文などがある (49~53)。49は口縁上端に円形の連続刺突が施され、稜をはさんで2条の沈線が縦位に施される。他の部分は横位にナデが加えられ、無文となる。焼成良好である。50は口縁部に稜を有し、尖り気味の工具による沈線が緩い弧を描いて垂下するものである。細蹠を少量含み、内外面ともに磨きが加えられている。52は縦位に一条の沈線が垂下する。胎土は密、焼成良好である。いずれも掘之内式である。
- c) 斜方向に沈線が施されるもの。三角文・菱形文などがある (54~58)。55は胎土粒子はやや粗く、白色粒子を含んでいる。56は沈線が比較的浅く、器面が内外面ともによく磨かれている。57は器面調整が粗雑である。細い棒状工具による沈線が施される。58は輪積み痕が観察される。54~56は掘之内式であろう。
- b) 横方向に沈線が施されるもの (59~61)。59・60は頸部に2条の沈線が巡るものである。59は8の字状貼付文が施される。掘之内式である。
- e) その他 (62・63) 62は竹管による刺突を2列配したもの。胎土粒子はやや粗く、砂粒を含む。63は半截竹管による平行沈線が縦位に施され、それに沿って爪形文が並ぶものである。内外面ともに入念に磨かれている。

5類 楯齒状工具による沈線が施されるもの (64)。櫛齒状工具で斜位に沈線が施される。内外面ともにナデが加えられる。胎土は緻密で焼成良好である。

6類 隆起線をもつもの (65~67)。65は刻目を施した隆起線が、波状口縁の波頂部から垂下しているものである。胎土は密で砂粒を多量に含む。内外面ともにナデが加えられる。器厚は5~6ミリである。66・67は隆起線上に範状工具による刻みが加えられる。

7類 口縁部破片中、1~4類のいずれとも考えられ、判別不可能なもの (68~75)。68は口縁上部に一条の沈線を有し、稜をおいてもう1条沈線が横走する。やや脆弱な土器である。70は緩い波状口縁で、波頂部に円形の刺突が施され、その刺突に向かって沈線が1条口縁に沿う。沈線直下の稜上に棒状工具による刻目が連続する。粗くナデが加えられている。69・70と同様の土器である。71は緩い波状口縁の波頂部に竹管による刺突と穿孔を有し、そこから隆起線が垂下する。内外面とも粗く磨きが加えられている。72は緩い波状口縁の波頂部に竹管による刺



第103圖 包含層出土繩文土器拓影圖(3)

突と穿孔を有し、そこに向かって口縁部に沿って沈線が巡るものである。内外面ともに磨きが加えられる。73は口唇部に折り返しがみられ、その上部に1条の沈線が巡る。砂粒を多く含みやや脆弱である。75は口縁上部に沈線が1条巡るものである。器面が荒れている。69~72は堀之内式であろう。

V群 現状で無文のもの (77~90)。77は口縁上端が内折して外面に稜を作出している。砂粒・細砾を多量に含む。内面調整は粗く、外面もナデを加える程度である。78は波状口縁で、頸部で緩く括れる器形の土器である。波頂部の口唇部は内屈している。砂粒を多量に含み、内外面ともにナデを加える程度の調整である。79は口縁内側に稜を有する。砂粒を多量に含み、内外面とも粗く磨きが加えられる。81・82は口縁が内傾する。外面よりも内面がよく磨かれている。83は口唇部が肥厚し、内面に稜を有する。84~87は縦方向に器面調整が行なわれ、90は斜方向に器面調整が行なわれている。

VI群 現状で縄文のみのもの (91~95)。91はLの撚糸文、93は不明、95~96はLRの縄文である。

VII群 底部を一括する (98・99)。98は角度の浅い連続刺突文を有す。内面はナデ、外面は磨きが加えられる。

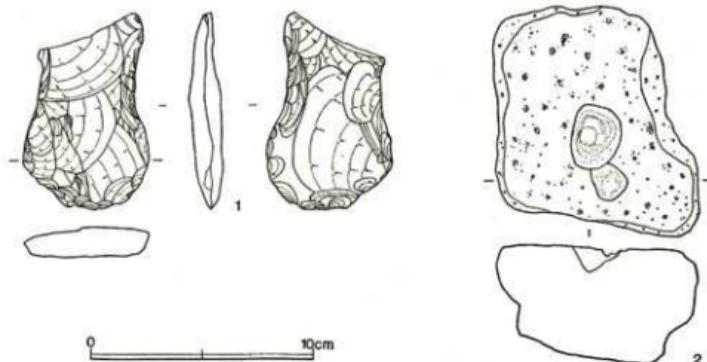
VIII群 手捏ね土器 (100)。砂粒を多量に含み、内外面とも砂粒の移動によりあれている。

C 包含層出土石器

本遺跡に於いて石器は2点の出土をみた。

1は分銅形の打製石斧で頭部が欠損している。表裏面とも全体に調整が加えられる。8.9×5.7cm大で厚さ5.3cm、重量91.0g。石質はホルソフエルスである。

2は多孔質の石を利用した凹石である。10.3×9.3cm大で厚さ5.3cm、重量は410.0g。石質は安山岩である。中心付近に凹みが一ヶ所、さらに横に浅い凹みがみられる。 (吉澤みゆき)

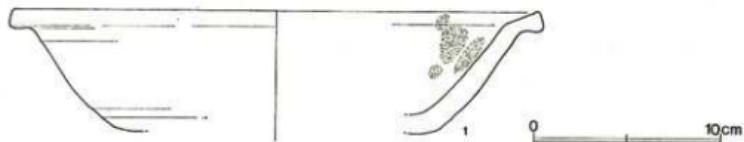


第104図 包含層出土石器実測図

D 陶器

本遺跡からは陶器片が数十片出土しているが、接合するものはほとんどなく同化できるものは1点のみである。陶器片はほとんどが近世の所産である。

(浜野 一重)



第105図 陶 器

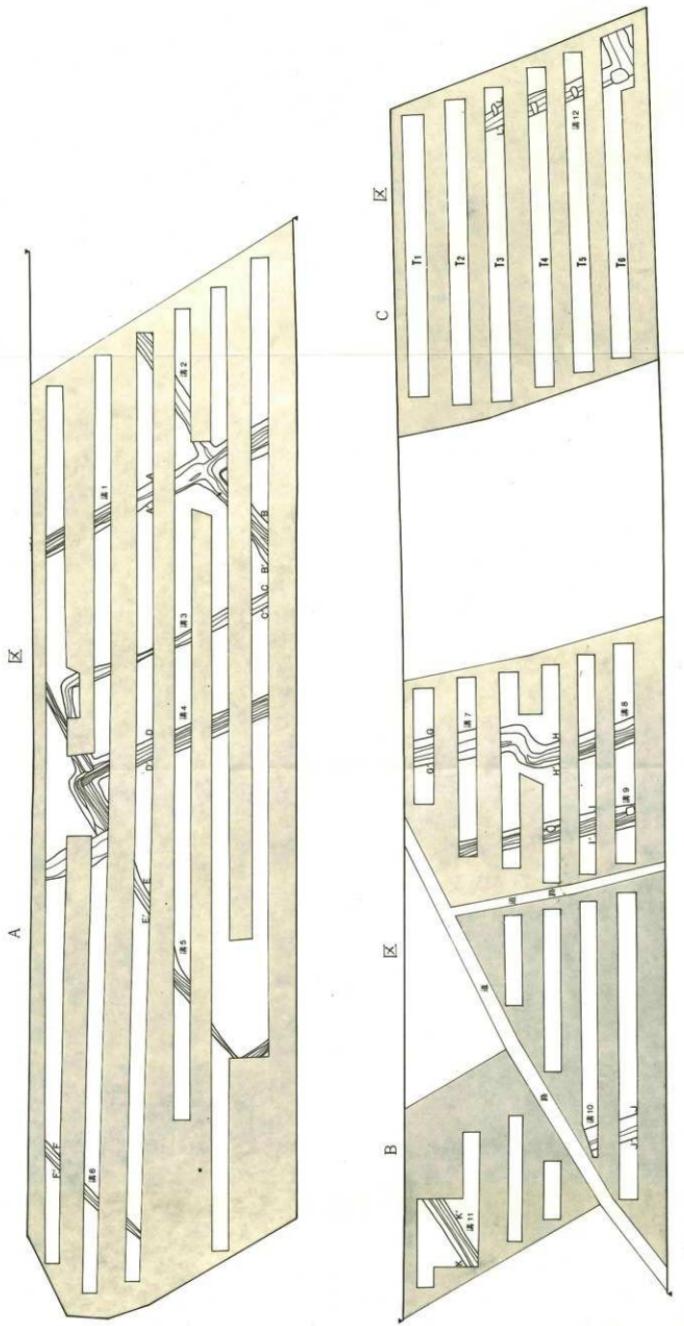
表27 陶器（第105図）観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調
1	折縁深皿	口径推定29.0	ろくろ整形 内・外面とも薄く長石釉を施し、内面の一部に銅錆釉を施す。	白色石粒を含む 10YR7/3に近い黄橙色

V 西浦遺跡発掘調査



第106図 周辺地形図



航107图 全剖面

1. 調査の経過（日誌抄）

昭和55年4月2日～8月22日

4月 機材搬入等、調査態勢を整え、A区から試掘溝（T1～T6）を設定し、バックホーにより表土除去にかかる。下旬までにA・B・C各区の試掘溝の表土除去終了。溝状遺構を12条確認しA区1号溝より調査に着手した。

5月 1・2号溝の交錯するT5・T6間の表土と、3・4・5号溝の交錯するT1・T2間の表土を除去し、関係を確認する。また、縄文土器片が散布するT6最南部を拡張したが関連する遺構は検出されなかっ。A区各溝の測量を平行して行なう。

6月 B区の溝の調査に着手。11号溝のかかるT1・T2間の表土と、7・8号溝のかかるT3・T4間の表土を除去し、方向・関係を確認する。7・8号溝は、曲折する同一の溝であった。A区1～6号溝の測量・写真撮影を終える。

7月 B区7～11号溝の調査継続。中旬よりC区12号溝の調査に着手する。

8月 上旬にB区7～11号溝の測量・写真撮影を終える。中旬に入ってC区号溝の測量に着手し22日には写真撮影を終え、全調査を終了した。

2. 遺跡の概観

西浦遺跡は、大宮台地のはば中央の小室支台上標高約15mの地点に位置する。周囲はほぼ平坦な地形であるが、調査区域は南に向かって浅い谷がはいる。

今回の調査範囲は長さ約300m、幅約32mの南北に細に細長い範囲で、途中東西に町道が横切り、町道以北はぶどう畑と宅地に利用され、町道以南は栗林と籬竹の藪であった。

調査の便宜上、栗林より南をA区、北側宅地部分までをB区、それ以北をC区として、路線に沿って幅約1.8mのトレンチを6本入れ、遺構を確認した。確認面は表土より30～60cmのローム上面である。A区南端では浅い谷に入るため、1mを越える部分もあった。

遺構は、溝12条のみ確認された。土層断面はトレント間の壁で測量し、溝と溝の切合の関係が不明瞭な部分はトレント間の表土を除去して調査を行なった。

溝の幅は0.5～4m、深さは確認面より20～60cmである。L字形やS字形に曲折するもの、十字に交叉するものもあり、断面形もU字を呈するものがある。

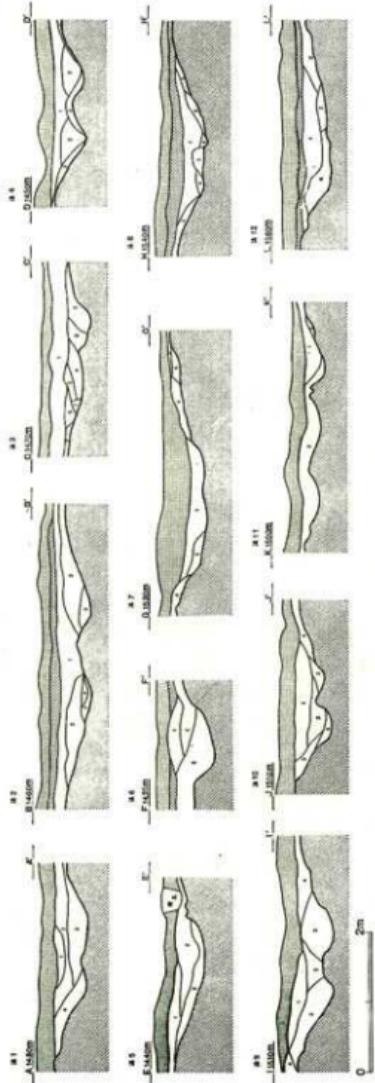
溝からの出土遺物は主として中・近世の陶器器片である。またA区南端にはロームと異なる褐色土の広がりが見られ、縄文土器が散布していたが遺構は確認されなかった。

12条の溝は、現在の地籍と合致する部分もあり、形状・出土遺物からも近世のものと思われる。

3. 遺構と出土遺物

A 溝

本遺跡からは12条の溝構が検出されている。直交するもの直角に曲折するもの、平行するものは最近の地籍図と照合すると地境にあてはまるものが多く、根切り溝である可能性が強い。



- 5号溝
 1 潤色土 ローム粘土を含む 砂質
 2 潤色土 大粒のローム粘土を含む
 3 明褐色土 ソフトローム・ロームブロックを含む
 4 潤色土 ロームブロックを含む
 5 分離土 ローム粘土を多量・ロームブロックを含む
 1 潤色土 ローム粘土を含む
 2 潤色土 ローム粘土を多量・ロームブロックを含む
 3 削離土 砂質
 4 削離土 ローム粘土・ロームブロックを含む
 5 削離土 ローム粘土・羅化物質を含む
 6 削離土 ローム粘土・ローム粘土を含む
 7 削離土 ローム粘土・砂質
 8 削離土 ローム粘土・砂質
 9 削離土 ローム粘土・砂質
 10 削離土 ローム粘土・砂質
 11 削離土 ローム粘土・砂質
 12 削離土 ローム粘土・砂質
 13 削離土 ローム粘土・砂質
 14 削離土 ローム粘土・砂質
 15 削離土 ローム粘土・砂質
 16 削離土 ローム粘土・砂質
 17 削離土 小さなロームブロックを含む
 18 削離土 ローム粘土・羅化物質を含む
 19 削離土 ローム粘土・砂質
 20 削離土 ローム粘土・砂質

- 9号溝
 1 斜面地帯 土 大粒のローム粘土を多量に含む
 2 斜面地帯 土 ローム粘土を少量・ロームブロックを含む
 3 斜面地帯 土 ローム粘土を多量・ロームブロックを含む
 4 斜面地帯 土 ローム粘土を少量・ロームブロックを含む
 5 斜面地帯 土 大きめのローム粘土を多量に含む
 6 斜面地帯 土 ローム粘土・粘土を少量含む しまり
 7 斜面地帯 土 大きめのローム粘土を少量含む しまり
 8 斜面地帯 土 ローム粘土・ロームブロックを含む
 9 斜面地帯 土 ローム粘土を少量含む しまりよし
 10 斜面地帯 土 ローム粘土を多量含む しまりよし
 11 斜面地帯 土 ローム粘土を少量含む しまりよし
 12 斜面地帯 土 ローム粘土を多量含む しまりよし
 13 斜面地帯 土 ローム粘土を少量含む しまりよし
 14 斜面地帯 土 ローム粘土を多量含む しまりよし
 15 斜面地帯 土 ローム粘土を少量含む しまりよし
 16 斜面地帯 土 ローム粘土を多量含む しまりよし
 17 斜面地帯 土 ローム粘土を少量含む しまりよし
 18 斜面地帯 土 ローム粘土を多量含む しまりよし
 19 斜面地帯 土 ローム粘土を少量含む しまりよし
 20 斜面地帯 土 ローム粘土を多量含む しまりよし
 合計

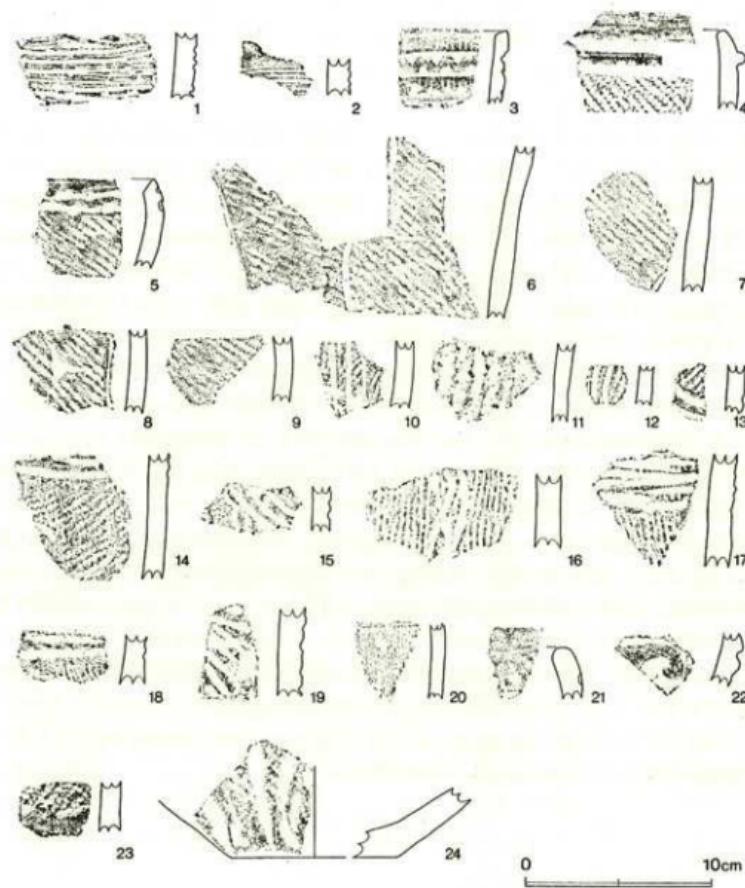
第108図 溝土壤断面図

B 包含層出土土器

本遺跡に於ける繩文土器の検出量は少なく、判別可能な遺物は24点である。

- I 群 前期の土器を本群とする。竹管文が施される（1・2）。1は半截竹管による平行沈線文が深く施されている。1・2ともに細緻・砂粒を多量に含む。焼成は良好で内面は丁寧に調整が行なわれる。諸畿期のものであろう。
- II 群 中期初頭の土器を本群とする。交互刺突文を有する(3)。3は沈線が數条横走する。1段目及び3段目は縦位の沈線が連続して浅目に施される。3段目は更にそこに刺突が連続する中段は交互に刺突が施される。胎土は緻密で細緻・長石・砂粒を含む。内面は丁寧にナデが加えられている。五領ヶ台期の所産であろう。
- III 群 中期後半の土器群である（4～24）。4は口縁部に隆起線を有する土器である。白色砂粒を多く含み内面は丁寧にナデが加えられる。R Lの繩文である。5～9は繩文原体・胎土・焼成より同一個体と推定される。無節Lを地文とし、沈線が浅く施される。口縁上端に2段の沈線上に施される円形刺突が巡る。口縁上端の文様よりやや間をおいて沈線が垂下する。胴部は直に垂下する沈線と蛇行して垂下する沈線がある。キャリバー形が崩れ若干内彌氣味の口縁を有し、頭部で括れることなく底部に至る器形と推定される。胎土は緻密で細緻・白色粒子を含む焼成良好の土器である。また内面は丁寧にナデが加えられている。10・11はR Lの繩文に縦位の沈線が、12はL Rの繩文に沈線が施される。13は無節Lの磨消繩文であろう。14はL Rの繩文を地文とし頭部に沈線が2条横走し、以下に弧状沈線が横走する。胎土は緻密で細緻・砂砾を含む。15はL Rの繩文に弧状沈線を3重に施し、外側の弧から沈線が垂下する。沈線間は磨消しが行なわれる。胎土は密で白色粒子を含む。内面はナデが加えられる。16は深く施されたLの撚糸文に2条の蛇行沈線が垂下する。17・18はLの撚糸文に太い沈線が横位に施されている。16～18は胎土は密で細緻・砂粒・白色粒子を含む。17・18は同一個体である。19は丸棒状工具で斜位に深く沈線を施した土器である。胎土はやや粗い。20は横位に施された沈線の下に櫛歯状工具による沈線が縦位に施される。内外面とも器面はよく調整されている。器厚は7～8ミリである。21は円形刺突を有する黒色の土器である。刺突の下に沈線を有している。22はS字或いは渦巻文の先端部であろう。23は底部付近、R Lの繩文の切れる部分である。24は胴部が張る深鉢形土器である。L Rの繩文を地文に、太く浅い沈線が縦位に施される。胎土は密で赤褐色粒子・砂粒を含む。内面はナデが加えられる。4・10は加曾利E 1、16～18は加曾利E 2、14・15・19は加曾利E 2～3、20・24は加曾利E 3、5～9は加曾利E 3以降の所産であろう。

（吉澤みゆき）

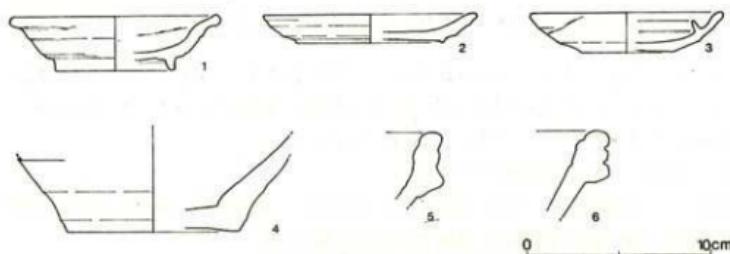


第109図 包含層出土縄文土器拓影図

C 陶器

溝から出土した数少ない遺物のほとんどは、中・近世陶器片である。そのうち図化できるもの 6 点を抽出して紹介しておく。

(浜野 一重)



第110図 陶 器

表28 陶器（第110図）観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態・手法の特徴	胎土・色調
1	皿	口径推定11.6 底径推定 6.6 器 高 3.0	ろくろ水掻き整形 削り出し高台 体部も削りによる調整 内面にはうすく長石釉を施し、口唇部より2cm程の幅で灰釉を施す	白色石粒・白色微細粒を含む 2.5Y6/2灰黄色 美濃反釉皿
2	皿	口径推定11.8 底径推定 8.0 器 高 1.6	ろくろ整形 浅い削り出し高台 底部を除く全面に長石釉を施す	乳白色石粒・白色石粒を含む 2.5Y8/2灰白色 志野皿
3	灯明皿	口径推定10.6 底径推定 5.0 器 高 2.2	ろくろ整形 内・外面とも削りによる調整 内面には淡く、外面には薄く鉄釉を施す	白色微細粒を含む 2.5Y8/4淡黄色(胎土) 2.5YR4/4にぶい赤褐色(釉)
4	擂り鉢	底径推定 9.4	ろくろ整形 底部回転糸切り底 内・外面とも鉄釉を施す 横目は磨耗により消えかかる	黒色砂粒・乳白色石粒を施す N 4灰色(釉) 5YR7/4にぶい橙色(胎土)
5	擂り鉢		ろくろ整形 口縁外面に縁帯がはり出し、2条の浅い沈線を施す	白色石粒・黑色石粒を含む 10R5/6赤色
6	擂り鉢		ろくろ整形 口縁外面に縁帯がはり出し、2条の深い沈線を施す	白色砂粒・乳白色石粒を含む 7.5YR4/2灰褐色

VI 伊奈町踏査資料

遺跡の発掘調査にかかる前に、上越新幹線の路線に沿い、予定調査区域を中心として11箇所の踏査を行なった。その際に表面採取した土器片が多数あり、その大半が縄文土器である。他に石器、弥生～古墳時代の土器片も散見される。このうち、縄文土器を資料として紹介する。

本踏査に於て表採した縄文土器は破片数にして約300点であり、うち判別可能なもの158点を抽出した。ここでは従来の型式変遷觀に従い縄文時代早期から晩期前半迄を群別に分類し、更に文様要素等により細分を行なった。なお、図は地点別となっている。

I群 早期後半の条痕系土器群に相当する。

1類 貝殻条痕が施される土器。繊維を含む(88・111)。88は外面のみ綫方向に、111は内外面とも斜方向に条痕が施される。焼成やや不良な土器である。

II群 前期前半、羽状縄文系土器群に相当する。

1類 組紐縄文を有するもの。繊維を含む(131～133)。131～133はともに焼成良好で内面は入念に磨かれる。

2類 羽状縄文を有するもの。繊維を含む(89・135)。89は無節Lの羽状縄文である。白色粒子を含む焼成不良の土器である。135はR Lの羽状縄文で内面は磨きが加えられる。

III群 前期後半、竹管文系土器群及びそれに併行する土器群である。

1類 半截竹管による連続爪形文を有するもの(136)。136は砂粒を多量に含む。

2類 半截竹管による平行沈線文を有するもの。

3類 貝殻腹縁による三角形の連続刺突文を有する土器である(119・120)。貝殻腹縁による連続刺突を119は2段、120は1段有する。白色粒子と砂粒を多量に含む。

IV群 中期前半 阿玉台・勝坂系の土器群である。

1類 角押文を有するもの(57・63・137)。57・63は金雲母を含む。137は57・63と比較して角押文が浅く広い。

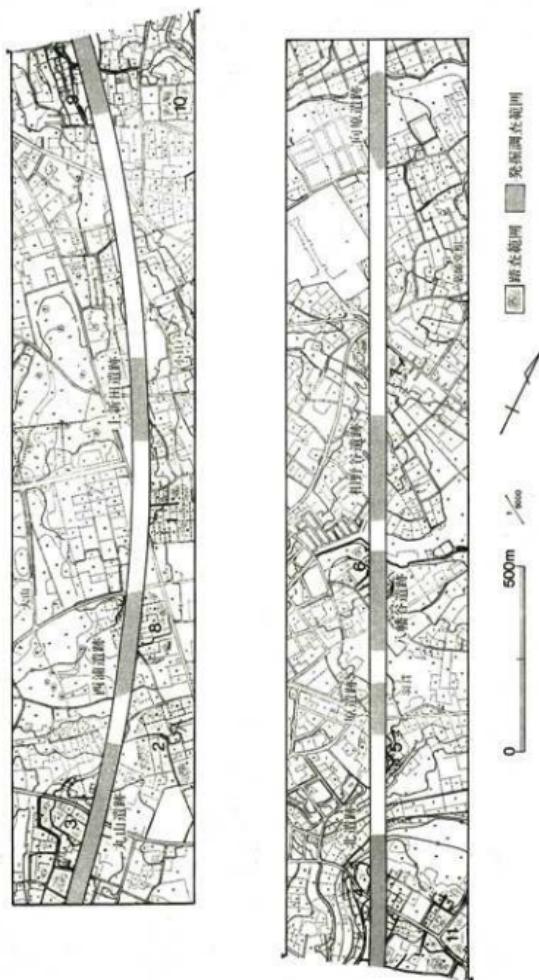
2類 大形の爪形文を有するもの(65～67・90・113・114・138～141)。65・66は隆起線上に爪形が施される。白色粒子を含む。67・138・140は稜・隆起線に沿って爪形が施される。141は波状沈線に沿って爪形が施される。金雲母を微量含む。

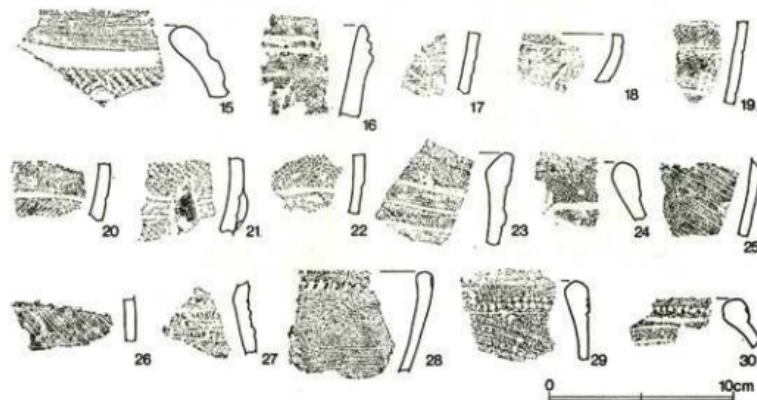
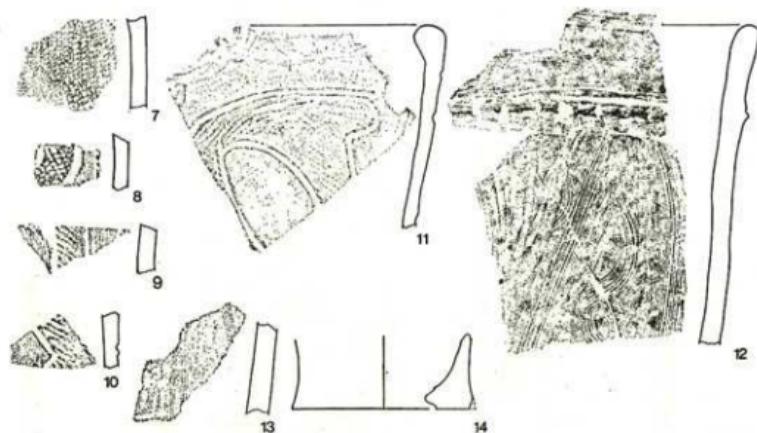
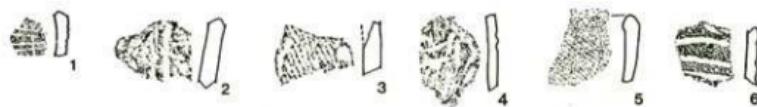
3類 隆起帯を有するもの(64・68・142)。

V群 中期後半、加曾利E系土器群に相当する。

1類 縄文に沈線或いは隆起線が施されるもの(15・69～73・93～97・101・124・144～147)。15はキャリバー状土器の口縁部である。無文部及び内面は入念に磨きが加えられる暗灰黄色の土器である。69はRの撚糸文に○字文を配している。70・71・95・96・144～148はR L、94・97・124はL R、72は無節、93はL R Lの縄文にそれぞれ沈線が施される。ほとんどが胎土に白色粒子を含む焼成良好な土器である。101はRの撚糸文に縦位の起線が、125はL Rの縄文にU字状の隆起線が施される土器である。

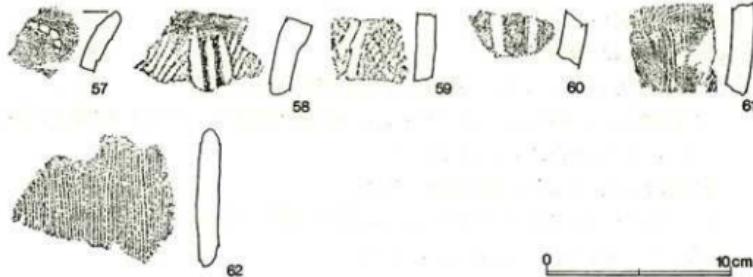
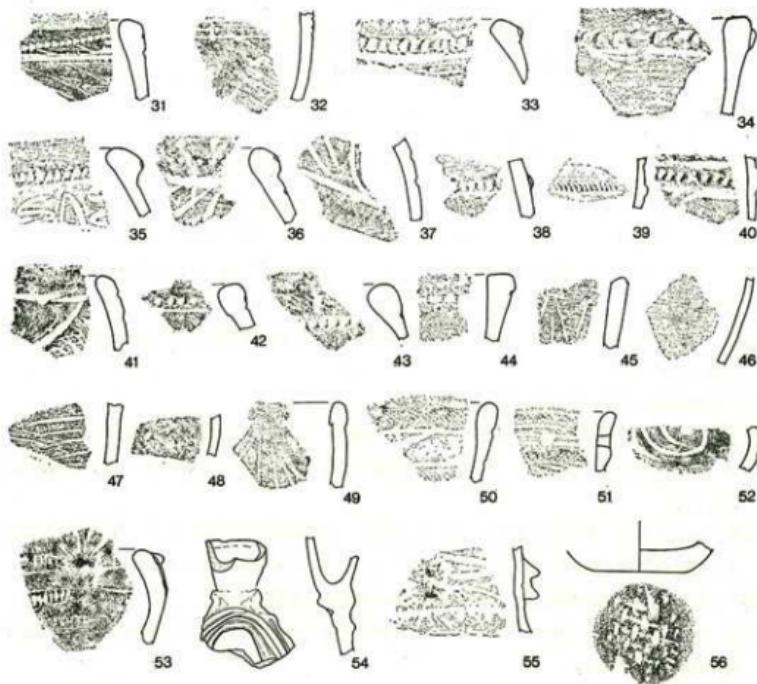
第111图 耕地地点位置图





0 10cm

第112図 繩文土器拓影図(1) 地点1～3



第113図 繩文土器拓影図(2) 地点3・4

2類 繩文に沈線或いは隆起線が施され、磨消の行なわれるもの(58~60・74・100・148~151)。

58は頭部である。LRが施され内面に磨きが加えられる。59はRL、60は磨滅のため原体不明だが輪積痕が観察できる。74・149はLR、100・148はRLである。100・148は内面に磨きが加えられる。150はRの撚糸文に蛇行する沈線が2条施され、沈線間が磨消される。白色粒子・砂粒を多量に含む。

3類 檜状工具による沈線を有するもの(61・62・76・77・102~104・115・121・126・127・152・153)。162は太めの工具ではっきりと、76・77は尖った工具で施文される。102は口縁部以下を檜状工具による集合沈線で埋める連爪文土器と推定されるため本類に含める。103は集合沈線施文後、丸棒状工具により沈線が施される。126は沈線区画内に集合沈線が施される。

4類 沈線のみで文様を構成するもの(128・154)。128・154とも胎土粒子は粗いが焼成良好である。

5類 他の地方の土器である(156)。円形の刺突が連続する隆起線に沿って沈線が施される。白色粒子を含む。

V群 後期初頭、称名寺系土器に相当する。

1類 沈線区画内に繩文を有するもの(8~11・106)。8~11・106はLRの繩文で、J字文、スペードJ字文の一部である。胎土粒子は緻密で極めて焼成良好な土器である。11は突起が認められる。

2類 檜状工具による沈線を有するもの(12・13)。12・13は同一個体である。刻みを施した稜が口縁部無文帯と胴部の沈線施文部を区画する。内外面ともに磨きが加えられる。

VI群 後期前半から中葉の堀之内・加曾利B系に相当する土器群である。

1類 磨消繩文を有するもの(17・18・84)。18は口縁上端にLRの繩文が施されている黒色研磨の鉢形土器である。

2類 沈線のみによって文様が構成されるもの(16)。丸棒状工具による沈線が2条口縁に沿って施される。

3類 粗製土器を一括する。斜行沈線・格子状沈線を有する(116・117)。

VII群 後期後葉から晚期前半、安行系土器群に相当する。

1類 深鉢形土器を一括する。

a種 帯繩文系の土器である。

I) 帯繩文をもつもの(19)。内外面とも入念に磨きが加えられる。

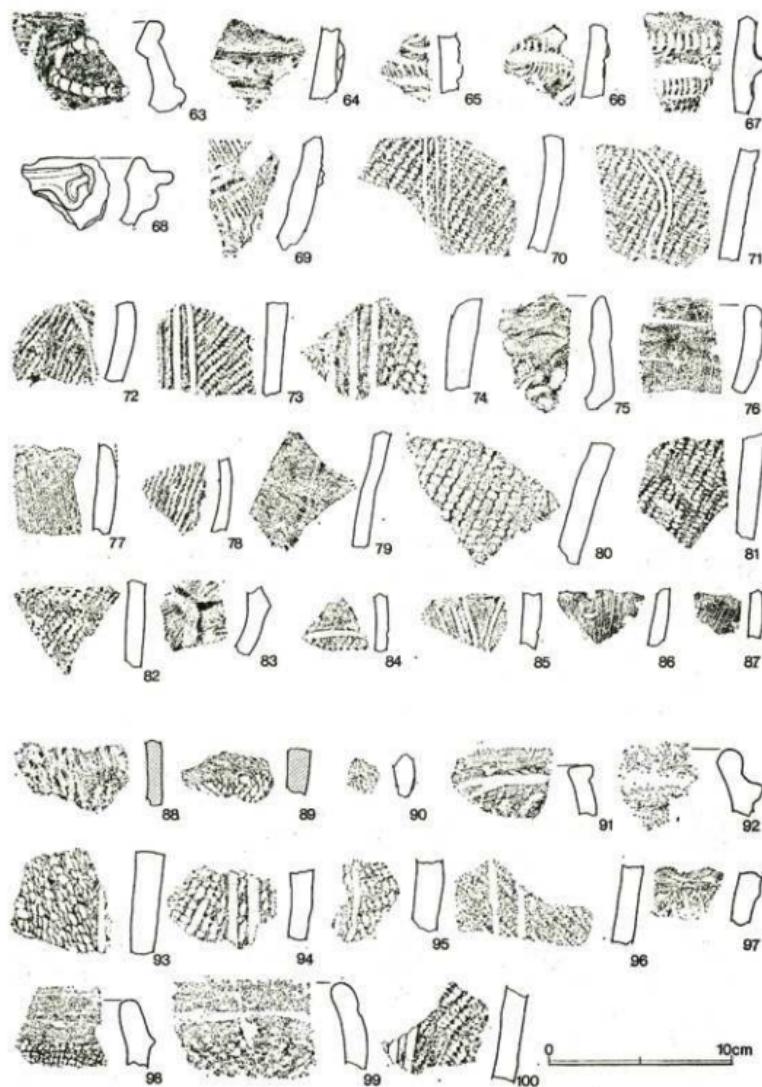
II) 隆起帶繩文を有するもの(8・20~23)。6・21・23はRL、20・22LRの繩文が施される。3・21は継長のコブを有する。

III) 柄状文のもの(24)。RLの繩文を有する。

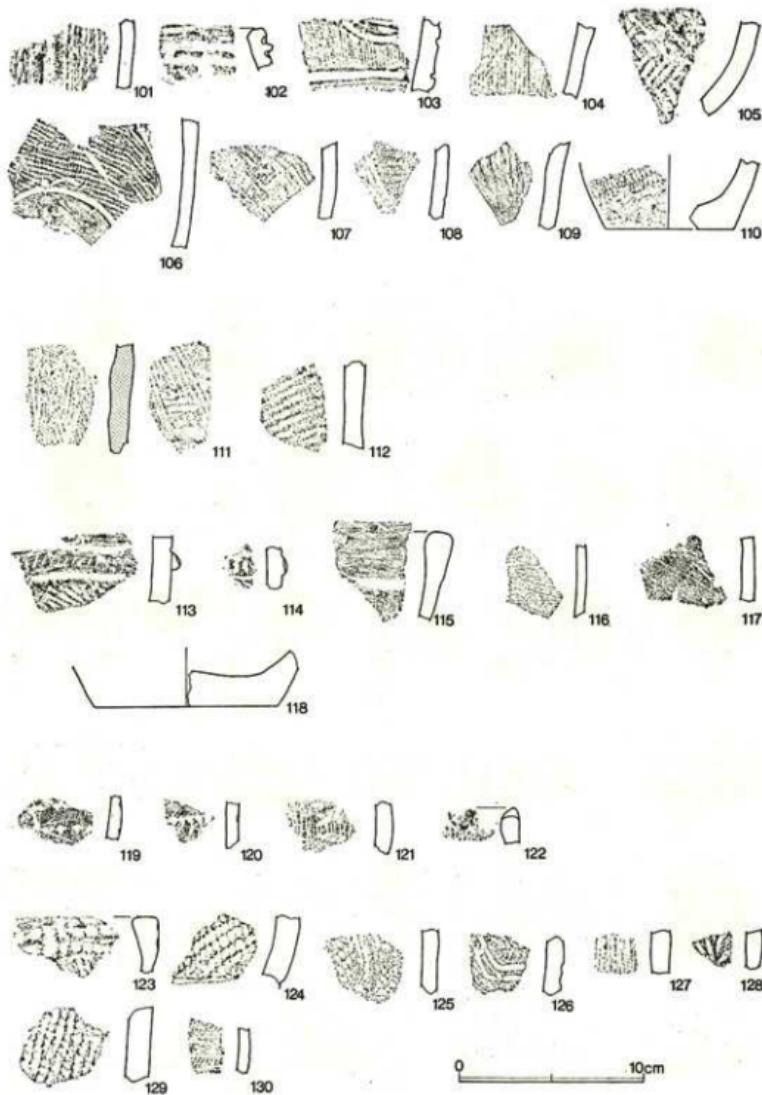
IV) 隆起帶分に繩文のかわり刻目が加えられるもの(27)。細い隆起带上に刻目が施され、括れ部に箋状工具による刺突が加えられる。

b種 細繩文系の土器である。

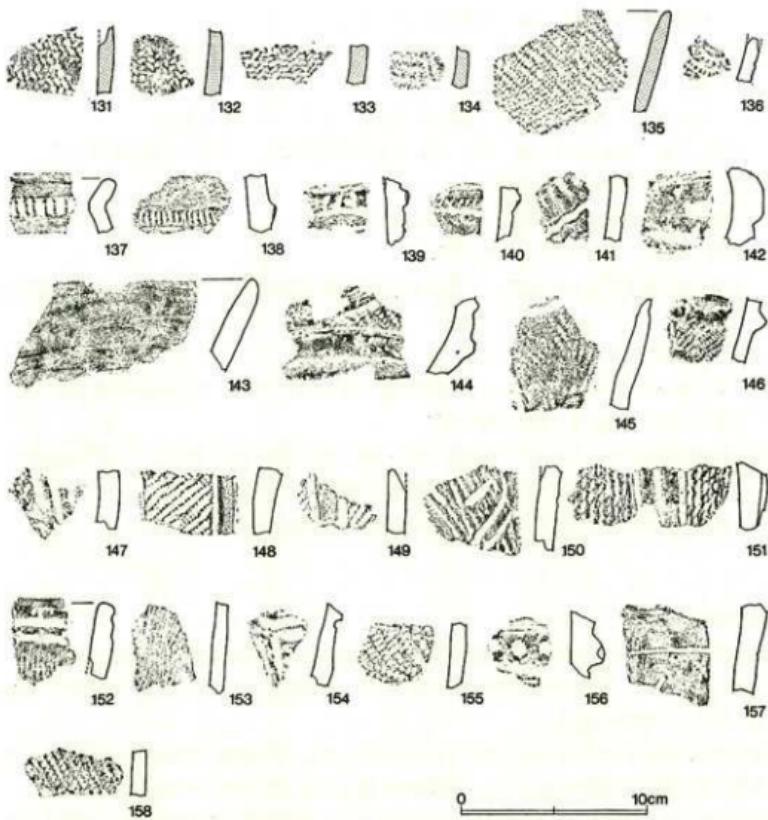
I) 口唇部の肥厚しないもの。口縁上端に紐線のかわりに刻目・刺突・沈線が巡る。胴部は



第114図 繩文土器拓影図(3) 地点5・6



第115図 繩文土器拓影図(4) 地点 7～9



第116図 繩文土器拓影図(3) 地点10・11

条線が施される（28）。

Ⅲ) 口唇部が肥厚するもの。口線上端に組線のかわりに刻目・刺突・沈線が巡る。胸部は条線が施される（29～31）。

Ⅳ) 口唇部が肥厚し組線部が隆起するもの。組線部に押捺が加えられ、胸部は条線が施される（33・34）。

Ⅴ) 口唇部が肥厚し、組線部が隆起するもの。組線部に押捺・刻目が巡り、口唇部に縦位の弧線の組合せと蛇行沈線が施される（35～41）。

Ⅵ) その他（43～45） 43は口線部に刺突が巡り、その上にRLの繩文が施されている。

44は口線部に押引きの沈線が巡り、その下に斜行する条線が施される。45は横方向の条線を地文とし、縦位及び斜位の沈線が施される。焼成不良の土器である。

c 種 沈線のみ施される土器（49）。波状口線の波頂部に向って5条の沈線が施される。

2類 浅鉢形・鉢形土器を一括する。

a 種 帯繩文をもつもの（50・51）。51は穿孔を有する。

b 種 玉抱き三叉文を有するもの（52）。

c 種 刻目を有するもの（53）。口線上端及び屈曲部に刻目を施した隆線をもつ。胸部は無文である。

3類 安行式併行の土器。

a 種 漏斗状の突起を有するもの。西関東に於てみられる曾谷式～安行1式併行の土器（54）。

b 種 所謂コブ付土器である（55・122）。

Ⅶ群 現状で繩文のみの土器（7・78～82・107・109・112・129・155・158）。7・80～82・109・112・155・158はRL、107・129はLR、78はRの燃糸文、79は無筋Lである。

Ⅷ群 底部を一括する（14・56・110）。56は綱代底、110はLRが施される。

地点別特徴

第1地黒一本地点では加曾利E式終末期の遺物が中心をなす。土器以外の遺物は認められない。

第2地点一本地点に於ては称名寺式が主体である。13・14は掘之内式と思われる。土器以外に黒曜石の剥片が1点認められる。

第3地点一本地点では安行1式から安行3a式が主体をなし、精製深鉢土器・粗製深鉢形土器・浅鉢形土器と器種も豊富である。また、磨製石斧欠損品1点、剥片10数点が認められる。

第4地点一大地点に於ては加曾利E式が主体をなしている。土器以外には打製石斧欠損品1点が認められる。

第5地点一本地点に於ては中期から後期前半の遺物が認められるが、主体は加曾利E式である。また、土器以外には剥片が2点認められる。

第6地点 本地点では点数は少數であるが、条痕文土器から称名寺式迄の遺物が認められる。主体は加曾利E式である。土器以外には剥片が2点認められる。

第7地点一本地点に於て時期の判別可能な遺物は早期の条痕文土器1点であるため、全体の傾向の把握は困難である。

第8地点一本地点では勝坂式から後期にかけての遺物が認められるが、量が少ないため、傾向の把握は困難である。

第9地点一本地点の遺物の検出量は非常に少ないが、浮島式、コブ付土器といった、他地域にその中心をもつ土器が目立つ。剥片が1点認められる。

第10地点一本地点では加曾利E式後半期の遺物が主体を占める。また、凹み石が1点、磨りのみられる石が1点認められる。

第11地点一本地点で前期から中期迄の遺物の検出をみると、加曾利E式を中心として、関山式、勝坂式がそれに続く、土器以外には磨石2点、打製石斧欠損品1点、搔・削器1点、剥片10点が認められる。

(吉澤みゆき)

VII 結語

向原遺跡について

向原遺跡は、遺構・遺物の記載からもわかるように、先土器時代・縄文時代・弥生時代・近世の各時代にわたる複合遺跡である。低地を臨む台地縁辺部に立地することが、生活の条件を満たし、集落形成を促す一要因なのであろう。

先土器時代の様相は遺物をもってとらえるしかできなかったが、その分布を見ると、調査範囲の斜面付近東側に集中し、さらに東に広がる可能性を予見させた。本遺跡における基本土層はソフトローム(Ⅱ層)の下に、第一黒色帶への新移層的性格をもつ層(Ⅲ層)があり、ハードロームはブロック状を呈し、層としては把握できない。出土した石器・礫等はⅢ層中のもので、前述したように武藏野台地Ⅳ層下部のものと対応されるものである。

縄文時代の遺構は、早期後半のファイアピットのみであった。遺物としては縄文早期全般にわたる土器群を中心として、土器溝の中土器群のはかわずかに後・晚期の破片もみられた。早期の土器群に関しては、綾瀬川流域ひいては埼玉県内においても、田戸下層式ととらえられる土器を中心として良好な資料であるといえよう。

弥生時代の遺構・遺物が向原遺跡の中心をなす。住居跡は22軒検出され、すべて弥生時代後期の範囲に納まるものと考えられるが、形状・遺物によって多少の時間差を認めることができる。

住居跡の形状から見て弥生時代後期においても先行すると見られるのは、8号住居跡と21号住居跡である。8号住居跡は小判形(胴張りの隅丸方形)を呈し、4本の主柱穴と炉の反対側に斜めに穿たれた小ピット(入口施設のためのものと考えられる)を持つ。21号住居跡は前述では隅丸方形としたが、北側は丸みを帯びており、胴張り隅丸方形であるかもしれない。いずれの住居跡も、掲載した土器は住居跡に伴うものと考えられ、8号住居跡-1の鉢や21号住居-1の台付甕は口縁部下に粘土帯の接合痕を明瞭に残し、古手の土器の特徴を持っている。

2号住居跡・18号住居跡は本遺跡においては比較的大型で、ベッド状遺構を備えて古い様相を呈しているが、紹介した土器はいずれも覆土上層より出土したもので、これらの住居跡に伴うものとは考え難い。2号住居跡-1の大型甕は弥生中期吉ヶ谷式とされるものであり、18号住居跡-1・3の台付甕は頭部がやや立上っており、新しい様相を呈している。

10号住居跡は本遺跡で最大の規模を持ち、唯一壁周溝を備えるものである。大型住居といってよいだろう。出土遺物も、図示したほとんどが住居跡に伴うと思われ、図中の1~3・7はやはり古い要素を持っている。炭化したドングリが床面から出土している。

19号住居跡・20号住居跡は1号方形周溝墓・2号方形周溝墓を意識して作られたかのようである。両住居跡とともに残存状態が悪いが形状・規模は相似している。

11号住居跡は焼失住居であろうと思われるが、炭化材の樹種同定の結果コナラ属の木であった。

13号住居跡は本遺跡中最もまとまって土器を出土した住居跡である。完形あるいは完形に近いものが多く、台付甕・甕・壺・高杯とセットになっているのも本遺跡唯一の例である。

方形周溝墓は、2基とも形状・規模に差異はないが、出土遺物から見ると、1号方形周溝墓が先行し、2号方形周溝墓が後出するようである。1号方形周溝墓の底部穿孔の壺や台付甕が比較的古い様相を呈するのに対し、2号方形周溝墓出土の頸部に突帯をもつ壺は、東海地方の影響をうけているとされ、前者より新しい様相を呈している。

溝はほとんどが近世のものと考えられるが、1号溝だけは他の溝と形状を異にし、台地肩部をめぐる形で検出された。途中で不明となってしまうが、南側では幅は2m近く、深さも1m近くありしっかりと掘り込まれている。この溝が弥生時代の集落と関連する溝であるか否かを結論づけるには決め手を欠くものである。

近世の遺構は根切り溝と炭焼窯である。炭焼窯8基は県内でも多い方に入る検出数と思われるがこの場所がそれだけ炭焼に適していた証左であろう。炭の樹種同定の結果コナラ属の材と判明し、いわゆる雜木を焼いて炭にしたものである。

おそらく近世より現在に至るまで、あるいは弥生時代からも、この付近は雜木林に囲まれた生活の場であったのではないだろうか。

(浜野 一重)

参考文献

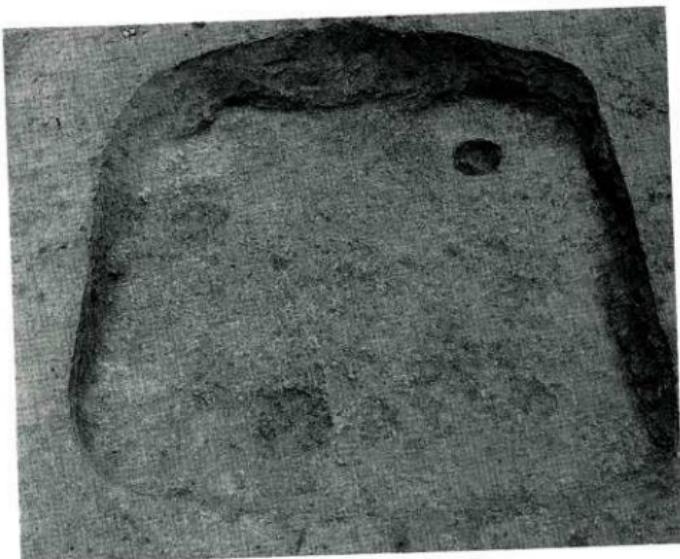
- | | | |
|----------------|------|---|
| 谷井彪・小久保徹 | 1976 | 『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 |
| 吉川国男ほか | 1977 | 『砂ヶ谷戸Ⅰ・Ⅱ、栗上遺跡』桶川市教育委員会 |
| 柳田敏司ほか | 1979 | 『駿山古墳・駿山遺跡』上尾市文化財調査報告第6集 |
| 田中信ほか | 1981 | 『小室天神前遺跡稿』 |
| 橋本富夫・今井正文 | 1984 | 『桶川市遺跡群発掘調査報告書』桶川市教育委員会 |
| 田中英司・飼持和夫・金子直行 | 1984 | 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集 |

図 版

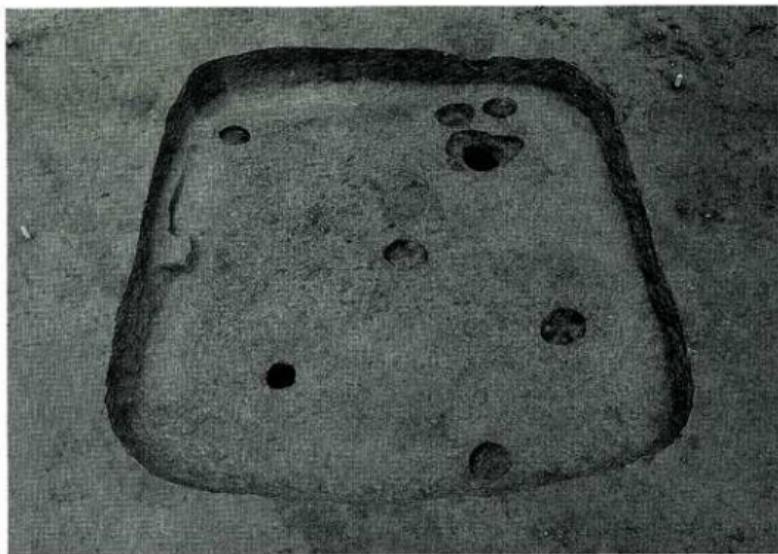
向原遺跡



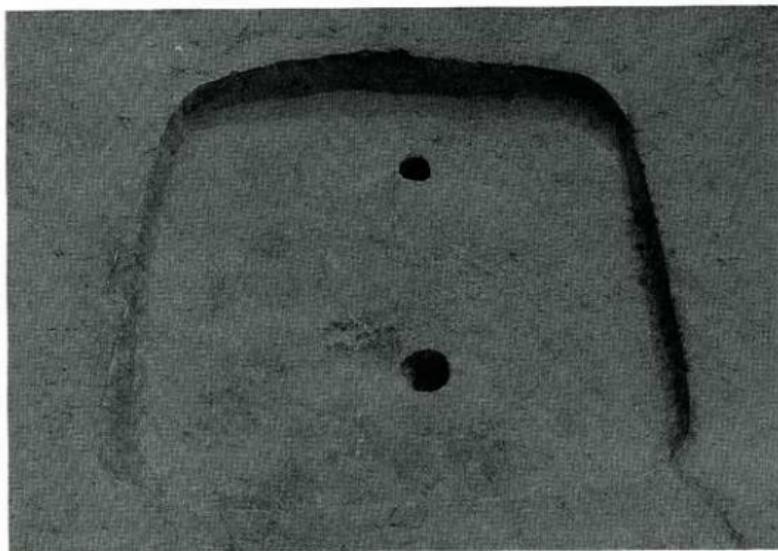
遺跡遠景（北より）



1号住居跡

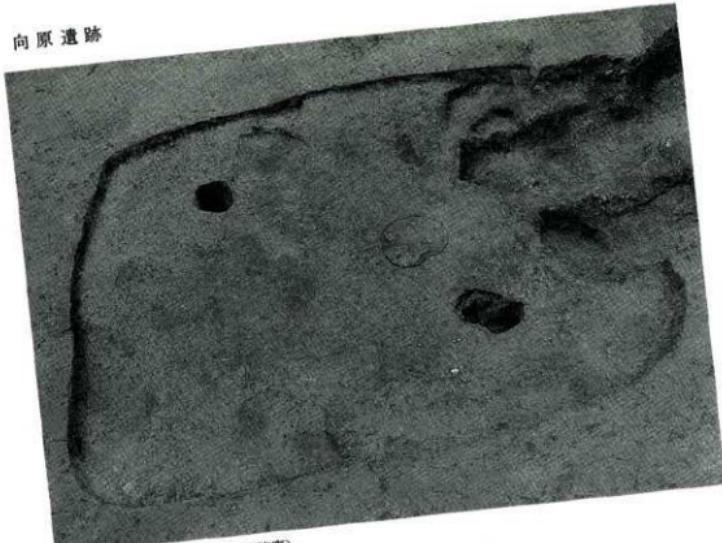


2号住居跡



4号住居跡

向原遺跡



5号住居跡（右側は1～3号炭焼窯）

6号住居跡

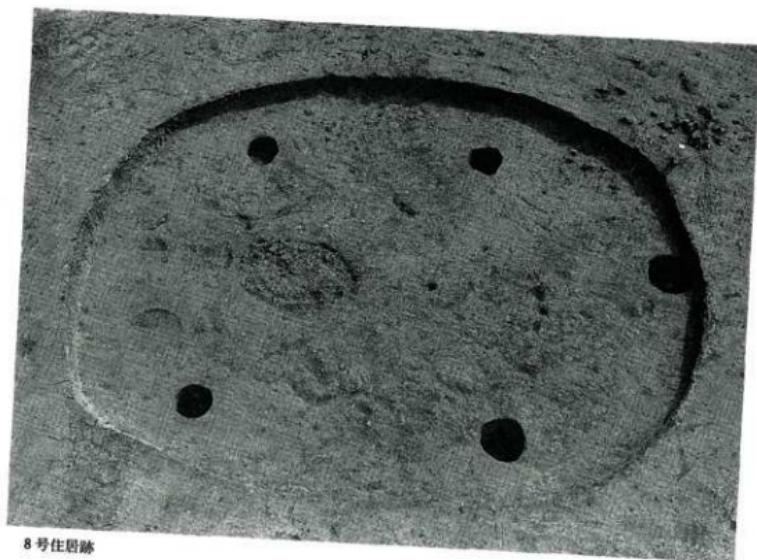


向原遺跡

図版 4



7号住居跡

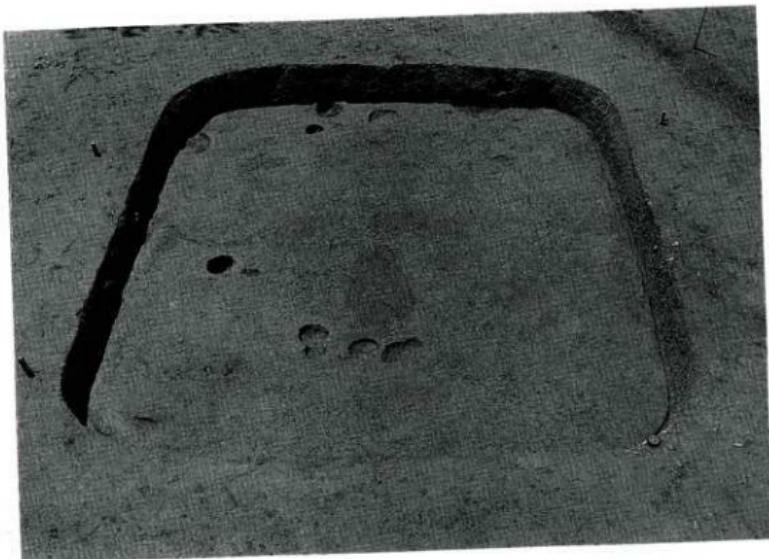


8号住居跡

向原遺跡



9号住居跡



10号住居跡

向原遺跡

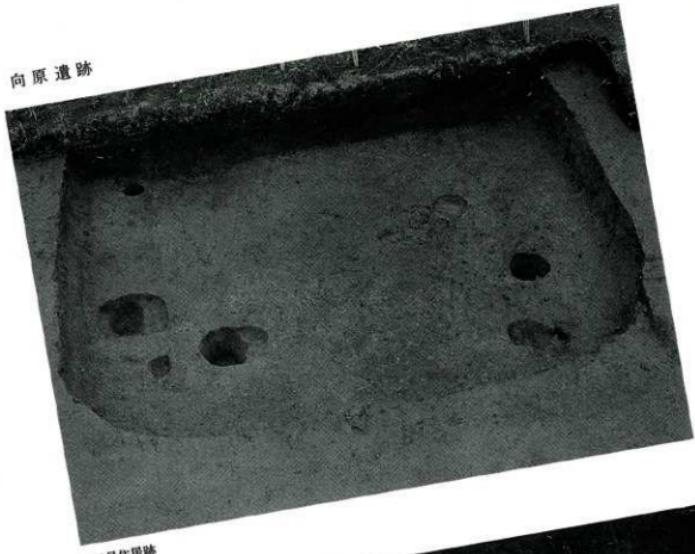


11号住居跡



11号住居跡遺物出土状態（第26図4）

向原遺跡

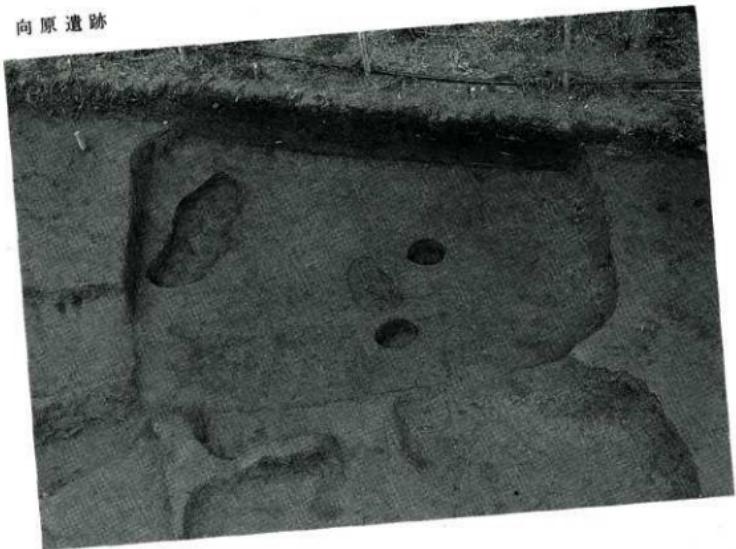


12号住居跡

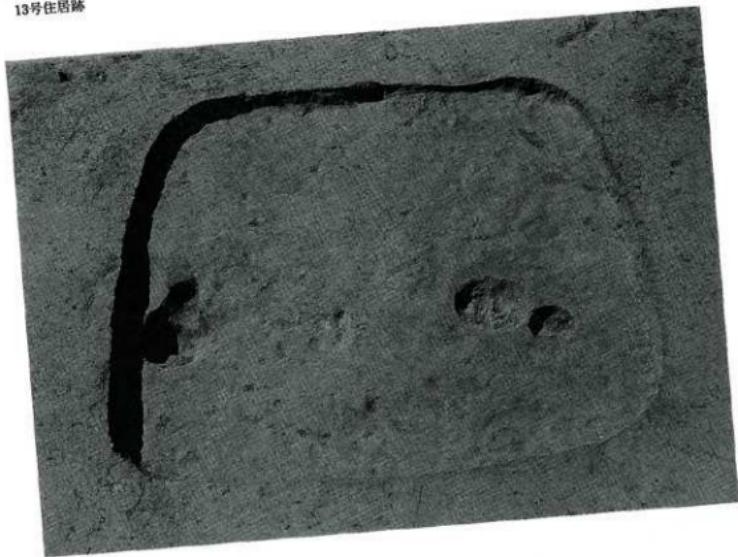


12号住居跡遺物出土状態

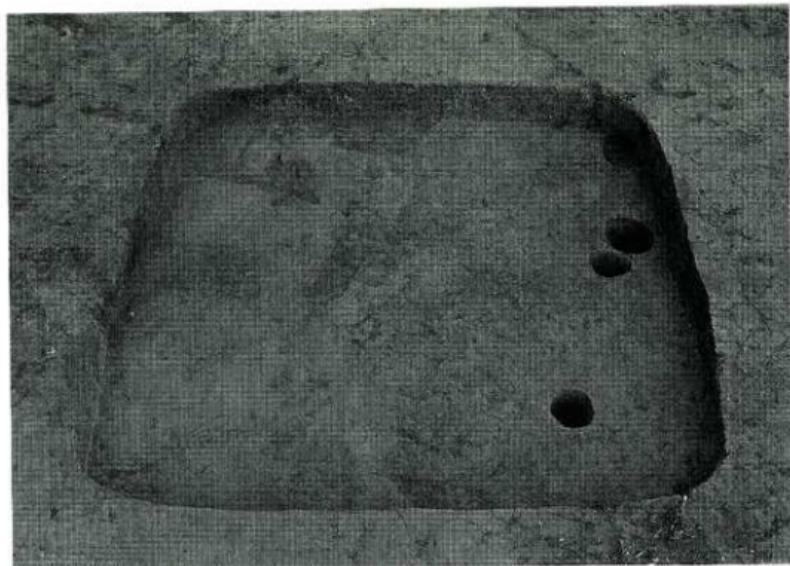
向原遺跡



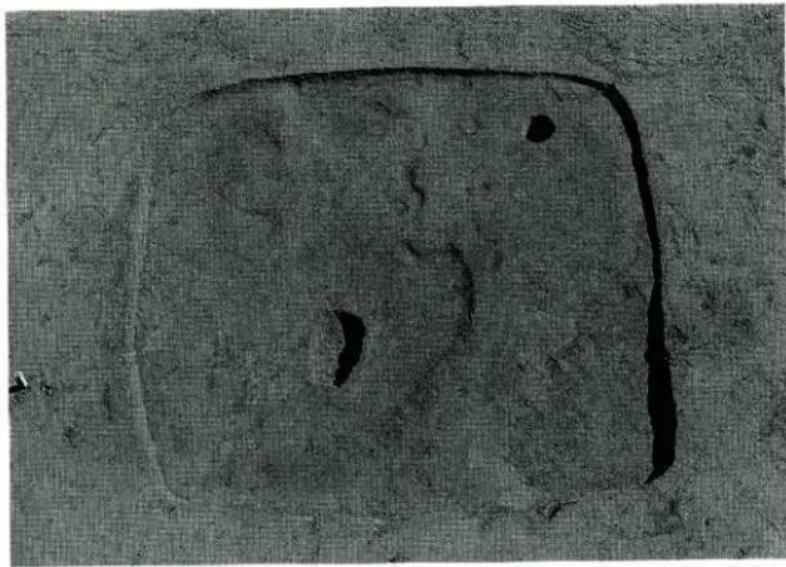
13号住居跡



14号住居跡



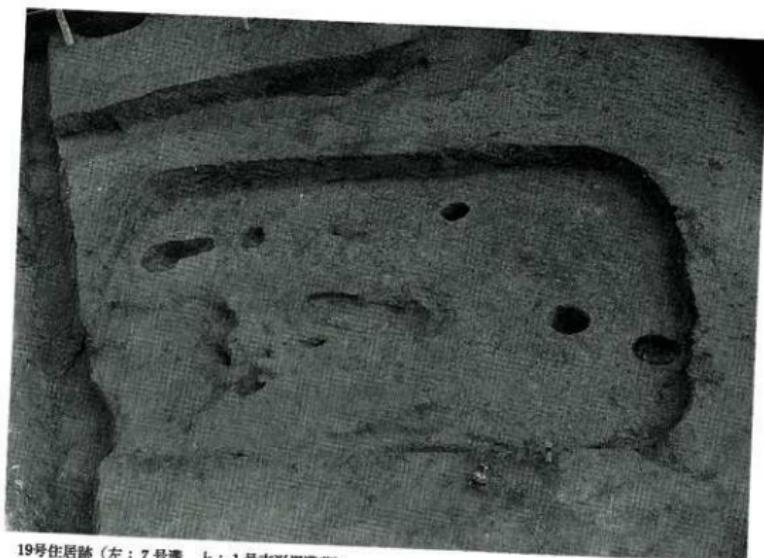
16号住居跡



17号住居跡

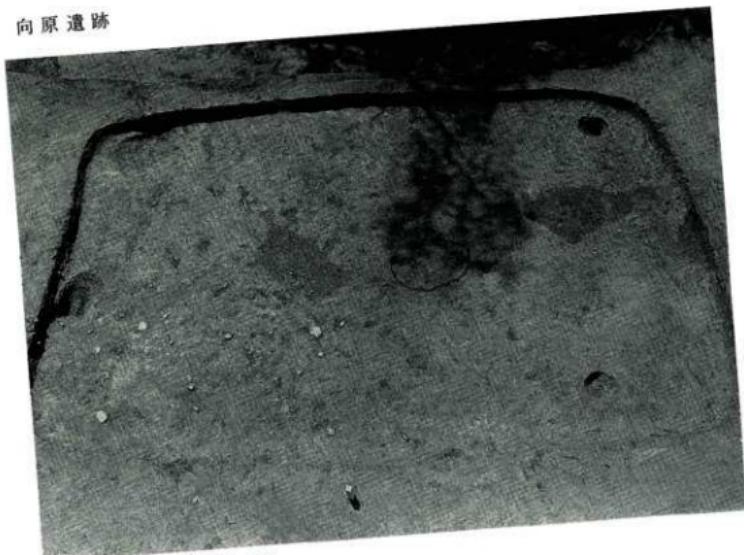


18号住居跡

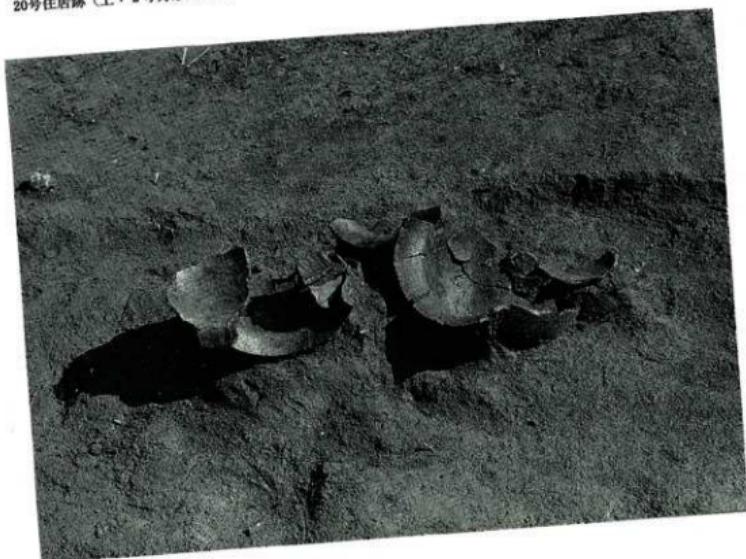


19号住居跡（左：7号溝 上：1号方形周溝墓）

向原遺跡



20号住居跡（上：2号方形周溝墓）



21号住居跡遺物出土状態



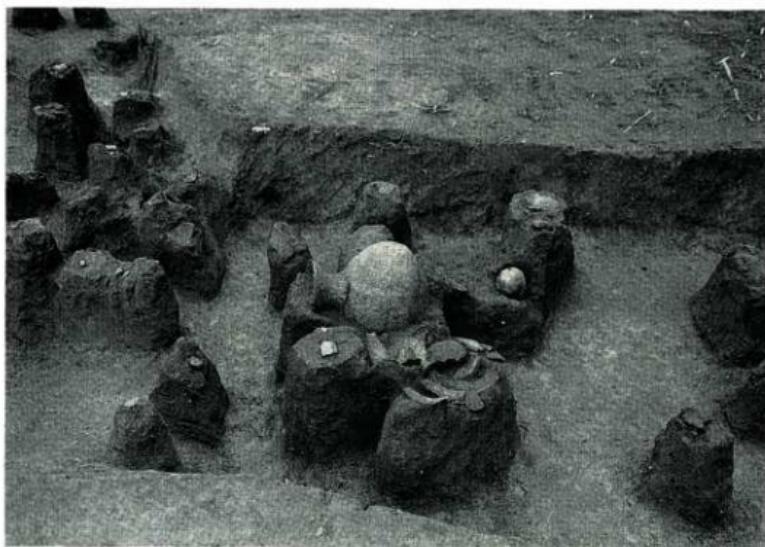
22号住居跡



23号住居跡



1号方形周溝墓（下：19号住居跡）



1号方形周溝基遺物出土状態